

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083
京都市中京区三条柳馬場東入中之町10
代表取締役社長 川下 晃正
TEL (075) 211-7277
FAX (075) 211-7270
<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

2019年 元名古屋短大教授 野津牧先生が同行・ご案内

スウェーデン・フィンランド の障がい児保育を学ぶ旅

ハビリテーション、統合保育など障がい児保育の実際を、
フィンランドではネウボラや特別支援クラス等を予定。
旅行中に野津先生のミニ講義も…。

2/11(月)～17(日)7日間 旅行費用 298,000円

- ♥中部発 フィンランド航空利用
- ♥定員 20名/最少催行 15名
- ♥申込締切 12/27
- ♥利用ホテル

ストックホルム=Park-Inn Solna ヘルシンキ=Sokos Presidentti
又は同等クラス ※添乗員は同行しません。

豪華客船シリヤライン
でバルト海クルーズも
ストックホルム⇄ヘルシンキ



Kirameki☆tour (株)富士ツーリスト

観光庁長官登録旅行業第1329号 460-0011 名古屋市中区大須4-1-9 菱水ビル
☎052-261-4621 ☎0120-898928

2018年から2019年へ

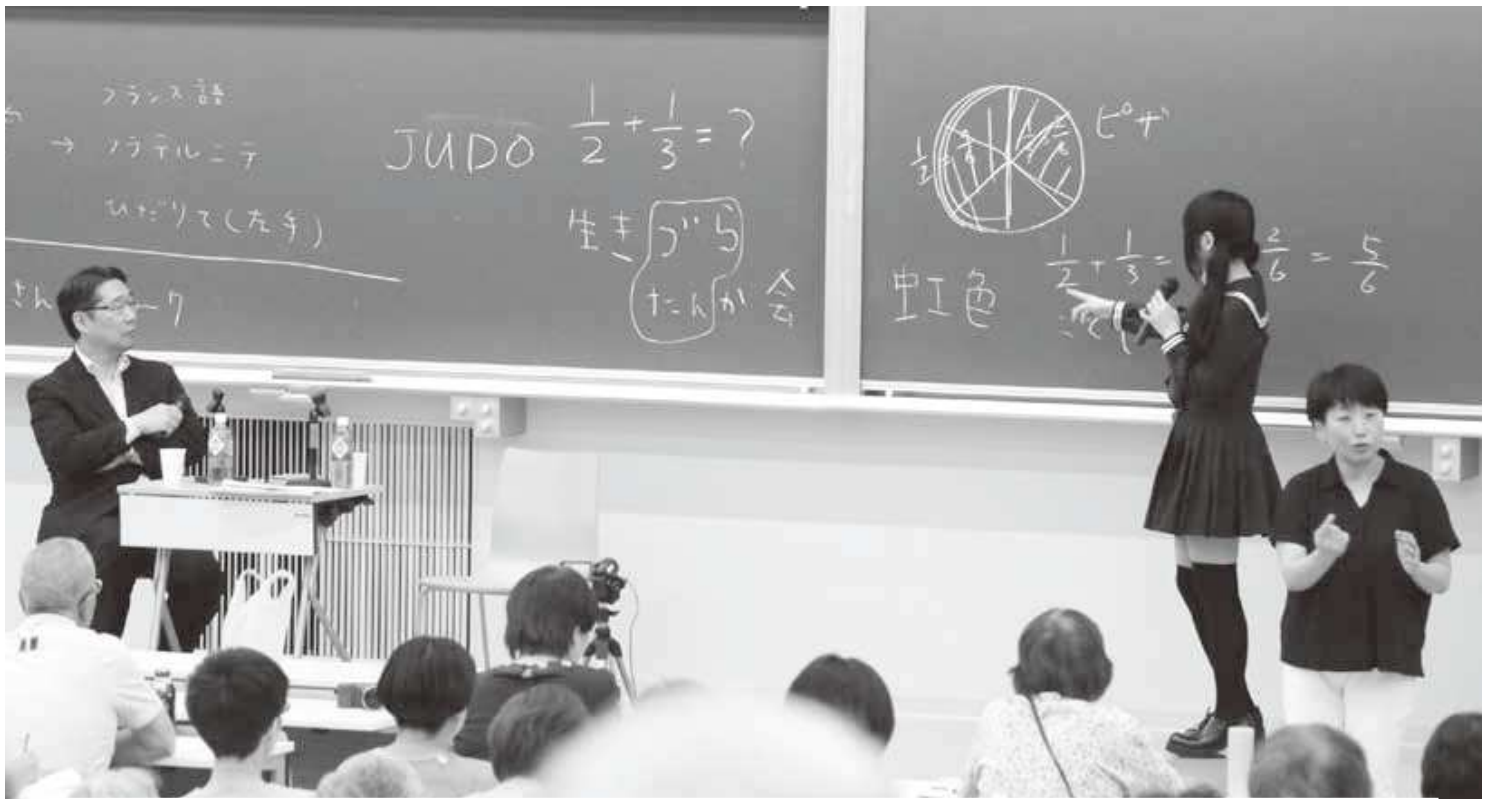


人が歩く その動きで 生活があれば よいのではないのでしょうか？
憲法は、そのように思います。走れ！ 止まれ！ 人の動きから社会福祉を遠ざけないでください。
周りが自衛隊に囲まれても 私たちは 時速四キロの人生を大切にしたいのです。(矢臼別にて)



北緯27度線を境に、南は沖縄、北は鹿児島。与論島は、1954年に返還。沖縄は1972年に返還。与論島は、二つの大きな集団移住を経験しました。第一次は、長崎口之津^{くちのつ}へ三池の石炭荷受作業。第二次は最後の満州開拓団。下の写真は、与論長屋の模擬展示（口之津民族歴史資料館・与論館）





夏の社会福祉研究交流集会は、^{めんじゅうふくはい}面従腹背の前川喜平さん、セーラー服の歌人鳥居さんに記念講演をして頂きました。二人のトークは、学習権を軸に、だれもが人として、学ぶ・生きる権利を持っている、と心からの賛歌でした。総合社会福祉研究所設立30年にふさわしい講演となりました。



日本最西端の島、与那国島に特別養護老人ホームを維持している社会福祉法人がありました。この島での高齢福祉をめぐる厳しい状況を伺いに出向いたのですが、あまりにも厳しい運営状況に、自己責任では維持できない現実を発信しました。ダンヌ会月桃の里。写真は、与那国の中心地^{そない}祖納地区。



視察メンバー



今年2月に厳冬、北極圏に近いスウェーデン・ウメオ視察に伺いました。ウメオ大学で研究されていた武内一さん（佛教大学）の案内で、スウェーデンの社会福祉、教育、まちづくりなど様々な示唆をいただきました。

●特集Ⅰ● 社会福祉現場で憲法と人間を活かす
現場から問い直す健康で文化的な暮らしとは

子どもと親の自立実現のために暮らしの場を築きたい

新井たかね 10

安心して、いきいきと心ゆたかな生活をめざす 西岡 修 14

虐待ケースが増える中で、
命さえ守れない子どもたちが増えている 武藤素明 18

社会福祉現場で憲法と人間を活かす 濱畑芳和 28

●特集Ⅱ● 2018年の貧困・生活保護問題を振り返って

【対談】加美さん・生田さんが語る

2018年の貧困・生活保護問題を振り返って

加美嘉史・生田武志 30

●トピックス●

樺戸・空知 集治監 黒田孝彦 38

四方山話 与論島からの第一次移住 編集主幹 44

「全世代型社会保障」のねらいと権利としての社会福祉事業 石倉康次 48

第23回合宿研究会 in 京都開催（1月12日・13日） 54

●連載●

社会福祉研究に人生あり！

1982年の訪英海外研修とその挫折—がんの手術から帰国へ

相澤與一 58

相談室の窓から

こだわりの奥にある発達へのまなざし（その1） 青木道忠 62

育つ風景 「友だち」 清水玲子 64

「助けて！」って言ってもええねんで！

子どもの声を聴いて！ 徳丸ゆき子 66

ひととしてあたりまえに生きたい

ろうあ協会青年部設立へ 清田 廣 68

映画案内 恋は雨上がりのように 吉村英夫 70

現代の貧困を訪ねて

台風被害と野宿者のテント村（その2） 生田武志 72

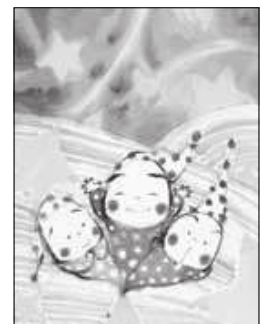
似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート

スーパーヒーローを描くのじゃー！ ラッキー植松 74

ホームレスから日本をみれば ありむら潜 76

花咲け！ 男やもめ 川口モトコ 77

●表紙の絵●
神門やす子



「沖縄・平和の学びと 連帯ツアー」に参加して

社会福祉法人 いずみ野福祉会
梅の里ホーム施設長

とようら
豊浦

あきこ
晶子さん

社会福祉施設経営者同友会の「沖縄・平和の学びと連帯ツアー」に初めて参加しました。今回のツアーではハンセン病療養所「沖縄愛楽園」も訪れました。

那覇空港からバスに乗り、ガイドの^{しもじてるあき}下地輝明さんのお話を聞きながらツアーが始まりました。沖縄戦では海からはなたれた艦砲射撃^{かんぽうしゃげき}が、凄まじい勢いで陸に突っ込み、一〇〇メートル四方にいた人達を、一瞬にして引きちぎったそうです。また、助かっても薬はなく、傷口にウジがわいて苦しみながら死んでいったそうです。誰もが「一発で死にたい」と願う毎日だったといえます。ツアーでおとずれた、ガマの暗闇のなかや、米軍が初めて上陸した海岸、アダン^{とげ}の木（亜熱帯や熱帯の海岸に群集して生育する常緑小高木。高さは二〜六メートルで葉は固く棘がある。多くの人が米軍から身を隠したと言われている）の前で、沖縄戦に思いを馳せようとしたが、私には想像することすらできませんでした。

下地さんのお話のなかで、「艦砲の食い残し」という歌が紹介されました。艦砲射撃から生き残った「自分」は「艦砲の食い残し」だという歌です。あの時みんな死んだ。だから生き残った自分はどう生きればいいのかを考える。それが戦後沖縄に生き残った、おじいとおばあの方だとうかがいました。「今だけ、自分だけ」がよければいい、「一部の勝ち組だけが生き残ればいい」という考えが横行している今、沖縄での学びをどう活かしていけばいいのかと考えました。

「沖縄平和祈念資料館」では、誰が沖縄戦を起こしたのか、ということがよくわかります。



とようら あきこ

2000年4月社会福祉法人いずみ野福祉会に入職

2010年4月より生活施設である梅の里ホーム管理職として奮闘中

当時日本軍は本土決戦に向けて準備を整えるため、時間を稼ぐ必要がありました。すでに沖縄では決着がついていましたが、首里しゅりにあった司令部を南部に移し、戦いが引き延ばされました。その結果、当時沖縄にいた四人に一人が亡くなる結果となったそうです。沖縄は本土の捨て石にされたのです。そこには沖縄に対する差別もあったのだということを知り、再び衝撃を受けました。

戦前から戦後と大切に受け継がれてきた生業なりわいの土地を、国によって強制的に奪われ基地ができました。翁長おなが元沖縄知事は「住民が同意して出来た基地は一つありません」とおっしゃっていました。沖縄を埋めつくす基地は、今も住民を苦しめています。今回のツアーに参加し、沖縄の人たちは自国から虐げしいたられてきたことに、何よりも怒っているのだとわかりました。また、国の権力に歯止めがきかなくなると、最終的に多くの尊い命が奪われるということを知りました。

「沖縄愛楽園」では講義のはじめにマザー・テレサの言葉「愛の反対は憎しみではなく無関心です」が紹介されました。下地さんが話された「平和の敵は無知である。平和の武器は学びである」の言葉と重なり、自身の行動について考えながら帰阪しました。

これまで、仕事や障害者運動について自分の問題として主体的に参加してきたと思っていましたが、今回の平和ツアーをとおして、「知らずしらずのうちに分けて」考えていたのではと気づきました。今後、沖縄での学びを仕事の「礎いしずえ」として、行動につなげていきたいです。

「ゆるしてください」「……五歳の女兒は、

叫びを文字に著して、いのちを絶った

この事件を、この文字を知って、多くの人が、この女兒への社会の無力と家族責任という従属の楔くさびに涙が止まらなかった。

今年のノーベル平和賞に選ばれたイラクの少数派ヤジディ教徒のナディア・ムラド・バセ・タハさん（二五歳）。ムラドさんは「声を上げられない人々の声になる。正義を求める人々のために立つ」と語り、性被害を受けた女性や迫害されている少数派のために、今後も活動していくと誓った。

ムラドさんは「私の目標は中東や世界で虐げられている少数派や性暴力の被害者を守ること」。そのうえで、「一つの賞や一人の人間では、その目的を達することはできない」と強調しました。「全ての政府に虐殺や性暴力の犯罪と闘うことを求める。世界は道徳的、法的な責任を持たないといけない。国益の前に人道主義がなければならない」と述べ、被害者救済へ国際社会がもっと積極的に取り組むよう訴えました。（米ワシントンで記者会見）

ノーベル平和賞とは真逆のことが行われました。それは、サンフランシスコ市との姉妹都市を

廃棄するという宣言でした。サンフランシスコの民間団体が建てた記念碑が昨年一月に市の所有となったことを受け、大阪市長は関係が崩れたとして姉妹都市解消を宣言したのです。碑文には「この記念碑は、一九三一年から一九四五年まで日本軍によって性奴隷にされ、『慰安婦』と呼ばれたアジア太平洋地域十三カ国にわたった何十万人の女性と少女の苦しみを表しています」と記されています。サンフランシスコ市長は声明で、関係は「六〇年以上緊密に続いており、両市の絆を断ち切るのは不可能だ。我々二都市の市民間に存在している関係を、一人の市長が一方的に終わらせることはできない」。記念碑は「奴隷化や性目的の人身売買に耐えることを強いられてきた、そして現在も強いられている全ての女性が直面する苦闘の象徴」だとも声明は記しています。「彼女たち犠牲者は尊敬に値するし、この記念碑は我々が絶対に忘れてはいけないできごとと教訓の全てを再認識させる」と述べています。

ムラドさんの訴えや願いは、そして、五歳の女兒の訴えは、どのように響くのでしょうか？

二〇一八年を通して、「どの人も健康で文化的な最低限度の生活を過ごせる権利がある」というテーマは、表面的な事象ではなく、今日本のなかで起こっている問題との対比で熟慮したいと取り組んできました。こだわり言い続けなければなりません。個の権利としての社会保障、権利としての社会福祉なのですから。

(編集主幹)